

- 日高地域は、全国第一位のスターチス産地であるが、近年は切り花単価の低迷が続いており、高単価が期待できる3月までの**収量の増加と生産コストの削減**が大きな課題となっている。
- 農業水産振興課では、県農業試験場暖地園芸センターで開発された増収効果の高い**電照栽培技術の導入**と種苗コストの削減が可能となる**県オリジナル品種の普及**を推進。
- その結果、**電照技術を20戸2.5haで導入、県オリジナル品種の栽培面積は1.9ha増加**。

### 具体的な成果

### 普及指導員の活動

#### 1 電照栽培技術の実証と普及

#### 1 電照栽培技術の実証と普及

■暖地園芸センターが開発した電照技術の導入を推進。

- 電照栽培試験ほを設置し、生育・収量を調査。
- 試験ほでの生育調査及び現地検討会の実施。
- 栽培技術研修会の開催。

- ①**導入農家数**  
0戸 → 20戸
- ②**導入面積**  
0ha → 2.5ha

#### 2 新品種の導入推進

- 県オリジナル品種の展示ほを設置し、品種特性を調査。
- 県オリジナル品種PR資料の作成・配布。
- 現地検討会及び品種説明会の開催。



栽培技術研修会



電照栽培

#### 2 新品種の導入推進

■県が育成したオリジナル新品種導入による低コスト栽培を推進し、栽培面積を拡大。

- 導入面積**  
4.8ha → 6.7ha



新品種現地検討会

### 普及指導員だからできたこと

- 新技術・新品種の導入を図るため、技術試験ほ・品種展示ほでの生育・適応性調査を実施。
- 普及組織がコーディネーターとなり、JA、試験研究機関等と役割分担を明確にした連携により栽培指導、導入推進活動を展開。**

## スターチスの新栽培技術・新品種の導入による産地強化

活動期間：平成 27～29 年度

### 1. 取組の背景

和歌山県におけるスターチスは、約 70ha の面積で栽培されており、出荷量約 6 千万本の全国第 1 位の産地を形成している。県出荷量の 9 割以上が日高地域で生産されており、管内における最も重要な品目の一つとなっている。

しかしながら、燃油高騰を契機に無加温或いは凍らない程度の加温を施す低温管理での栽培が主流となり、冬季の生育が遅延し、高値が期待できる 3 月までの収量が減少して 4 月以降の集中出荷につながり大幅な価格の下落を招いている。また、スターチス生産に必要な経費のうち、種苗費が約 40% を占めている。これが経営を圧迫する大きな要因となっており、その削減が求められている。

そこで、暖地園芸センターで開発された増収効果の高い新電照栽培技術の導入を図り、3 月までの収量増加を目指すとともに、パテント料が不要で種苗コストの削減が可能となる県オリジナル品種の普及を推進することでスターチス産地のさらなる強化を図る。

### 2. 活動内容

#### (1) 電照栽培技術の実証と普及

##### ア 実証ほの設置

LED 電球を活用した電照栽培技術の現地適応性を確認するため、御坊市 2 箇所、印南町 1 箇所の計 3 箇所で 9 月下旬から実証ほを設置した。電照処理を点灯開始から 3 月中旬まで連続して行う区と 12 月末で打ち切る区を設け、処理期間が切り花本数に及ぼす影響を無処理と比較した。

##### イ 研修会および現地検討会の開催

8 月に生産者を対象とした電照栽培技術の研修会を開催し、電照栽培の方法や留意点について説明した（写真 1）。また、関係機関（暖地園芸センター、JA 紀州）とともに、8 月に前年度の現地試験報告会、1 月に実証ほの現地検討会を開催し、電照栽培による増収効果について情報の共有を図るとともに普及上の課題について検討した。

#### (2) 県オリジナル品種の導入推進

##### ア 展示ほの設置

関係機関と協議を行い、暖地園芸センターで育成中の 9 系統（ピンク 4 系統、ブルー 3 系統、紫 2 系統）の現地適応性を検討するため、展示ほを御坊市 4 箇所、印南町 2 箇所の計 6 箇所に設置し、生育、収量の調査を行った。1 月には展示ほの現地検討会を開催し、有望系統の選定に関して意見交換を行った（写真 2）。

##### イ 品種説明会の開催

11 月に JA 紀州主催の品種説明会において「紀州ファインラベンダー」、「紀州ファインピンク」等の県オリジナル品種 8 品種の資料を生産者に配布して品種特性等を説明し、作付けの推進を図った。



写真1 電照栽培技術研修会



写真2 県育成系統の現地検討会

### 3. 具体的な成果

#### (1) 電照栽培技術の実証と普及

実証ほの調査結果から3月中旬までの電照処理区の切り花本数は、無処理より若干の増加に留まった。また、電照処理の期間については、12月末までと3月中旬までで切り花本数に差は認められず、電照処理は年末まででかまわないことが示唆された(図1)。電照処理による切り花品質(草丈等)の低下は前年度に比べて少なかった。

本年度は、御坊市・印南町において前年度から微増となる約2.5ha(農家戸数:20戸)で電照栽培技術が導入されていた。ただし、光源は白熱電球が中心であり、LED電球の利用は16a(1戸)のみであった。

#### (2) 県オリジナル品種の導入推進

前年度の日高管内における県オリジナル品種の作付面積は約6.5haであったが、本年度は6.7haに微増した。「紀州ファイน์イエロー」と「紀州ファイน์パール」は競合する優良品種がないことから、それぞれ同色での作付比率は69%及び93%であった。一方、競合する品種が多い紫、ブルー系では、県オリジナル品種の作付率は少なく、「紀州ファイน์ラベンダー」の作付比率15%が最高であった。

展示ほの県育成系統では、ピンクの「13P26」、ブルーの「15B1」の評価が高かった。

### 4. 農家等からの評価・コメント

#### (1) 電照栽培技術の実証(御坊市 N氏)

電照栽培は昨年作から試験的に取り組んでいるが、昨年ほどではないものの今年も増収効果を感じた。年度による増収効果の違いを少なくして安定した効果をあげるための技術の改良が必要だと考える。また、LED電球は高価であり、実際の導入には費用面のハードルが高い。

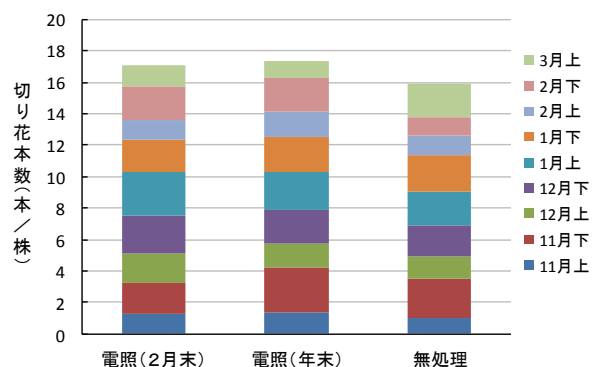


図1 電照栽培による時期別の切り花本数

注) 電照(2月末)区は、作業の都合により2月27日に処理を打ち切った

## (2) 県オリジナル品種の導入推進（御坊市 S氏）

県オリジナル品種は、種苗費の削減という面からは有効であるが、品種によっては、ほ場や栽培管理の良否で収量や品質に大きな差が見られる。今後は作りやすさも重視した品種育成を望むとともに、栽培管理上の留意点など農家への作り方に関する積極的な情報提供をお願いしたい。

## 5. 普及指導員のコメント（日高振興局農林水産振興部農業水産振興課・主任・伊藤吉成）

電照栽培技術については、定植後の台風や10月の天候不順、11月からの低温基調の条件が予想以上に大きく影響し、電照処理による増収効果が充分得られなかった。一方、電照処理の期間は、10月上旬から12月末までで、3月までと同等の増収効果が得られることが分かった。

県育成系統については、複数の現地ほ場における栽培によって特性を確認することができた。草丈が伸びにくい等の欠点については、栽培管理の方法で解消できるか引き続き検討していく。新品種である「紀州ファインピンク」、「紀州ファインブルー」、「紀州ファインパープル」についても現地の栽培状況を確認しながら、栽培上の課題の抽出とその対策を講じていく。

## 6. 現状・今後の展開等

電照栽培技術の現地適応性を数年にわたって検証した結果、増収効果は確認できたが、ほ場や年次によって効果にばらつきが生じることも明らかになった。増収効果を安定して得るため、関係機関とも連携して技術のブラッシュアップに努めるとともに、増収技術のひとつとして普及を図っていく。

県オリジナル品種については、「紀州ファインピンク」に加え、「紀州ファインブルー」、「紀州ファインパープル」等の新品種について産地での栽培特性の把握に努め、栽培に役立つ情報として現場に返し、栽培管理技術の高位平準化を図る。

また、種苗費の削減に関しては、暖地園芸センターで固化培地を活用した低コスト新育苗技術が開発された。県オリジナル品種をこの技術で育苗すれば、市販の定植苗を購入する場合と比べて約40%のコスト削減が可能とされるので、次年度からの普及課題ととらえ現地実証を行っていく。